

工業高校の再評価をめざして



遠山辰四郎

アンケートで見る工業高校生

本校二年生一クラス(男36 女2)入学してよかったと思っているかどうかアンケートをとってみた結果は次のようであった。

- 1 本校に入学してよかったと思ったか(入学時)
非常によかった3人 よかった7 普通25
あまりよくなかった3 よくなかった1
- 2 現在はどう思っているか(二年終了時)
非常によかった4人 よかった17 普通13
あまりよくなかった1 よくなかった3
- 3 本校を選んだ理由(複数回答)
専門の勉強ができる17人 就職に有利15

クラブで活躍したかった15

- 4 本校に入学してよかったと思うこと(複数回答)

いろいろ資格が取れる20人

専門の勉強ができる18 実習で力がつく10

クラブ活動ができる6

- 5 生徒指導は厳しいと思うか

普通24人 厳しくない4 あまり厳しくない6

厳しい4

このアンケートからいえることは、入学時よりも学校生活がある程度経験した方が満足度が高まっていることで、学校としては合格点と言えるのではないだろうか。本校を選んだ理由としては、「専門教科の勉強ができる」が半数近く占めて、目的意識の明確な生徒が

多い。現実的な選択の中にも専門職として生きようとする夢も含まれているのだらう。勉強が厳しいと感じる以上に、新しい学習内容や実習に新鮮さを感じながら、比較的ゆつたりとした学習環境を経験していると考えられる。

また、将来に備え各種の資格取得に積極的で、新しいものへの挑戦として学習の動機づけとなっている。生徒指導では、学校の規則に対して厳しいと感じている生徒は一部くらいで、自由な雰囲気のある学校生活と感じているようだ。髪を染めたり、ピアスをしたり、制服を着なかつたりという生徒もいるが、機械的な取締りの指導でなく、本人の自覚を促すことから指導していき、最終的には保護者に協力を訴えるという方法をとっていることが、開放感を与えているようである。三年生にも同じ調査をしたが、ほとんど同様の結果であった。生徒にとっては、全体的に「暮らしやすい」学校となっているようである。

工業高校の社会的評価

技術や技能資格取得のための「専門学校」「専修学校」が高学歴社会とともに急増してきた。工業高校は中堅

技術者の育成を目的とした学校で、高度成長期に日本の社会を支える背骨ともいえる人的資源を供給してきた。

しかし、今やその役割を「専門学校」「専修学校」に取って代わられつつある。工業高校は、中学生はもちろん父母県民にも魅力のない学校になってきているようだ。いわゆる「職業高校（専門学校）」の地位の低下は著しく、教育行政はこのことを反映して、普通科と職業科の構成比を7:3にするといっている。また、学科の再編成、整理統合、学級減、そして総合高校への移行と進んできている。

それでは工業高校の役割は終わったのだろうか。また、工業高校に未来はないのだろうか。産業界との関わりから考察してみたい。

この産業界と県内工業高校の関わりについての論議が、現在の生徒と今後入学してくる子どもたちにとって職業高校を「希望のもてる学校」とするための合意形成に役立てればと思う。

工業高校の歩んできた道

工業高校の卒業生が、どのように社会に貢献してき

たかを証明することはそう難しくはない。それは各高校の同窓会名簿などから推測できる。会社を興し、そのトップで活躍している人も大勢いるが、一番多いのは製造・生産現場で中心的役割を担っている人たちが、すなわち産業の実戦に携わっている人たちであろう。多くの企業・事業所は「工業高校卒」者の技術拔きには成り立たないのではなからうか。

しかし、彼らの現状を見るに、その働きに見合った待遇を与えられてきたかという点で肯定できるものではない。日本の労働条件の最大の欠陥（弱点）は、長時間労働と残業により生活費を充足することではないかと思うが、この被害をともに受けてきた人たちは「高卒」者であろう。当然例外はあるが、仕事内容は何ら変わらないのに「高卒」ゆえの「昇進の頭打ち」「賃金ランクの頭打ち」が学歴社会の常識として行われてきたことが、高卒の評価を下げてきたといえる。つまり仕事の質と量に見合った生活（賃金や評価）が保障されなかったことに大きな原因がある。

産業全体を下支えしている技術・技能を正當に評価できない社会構造が、工業高校など専門高校への魅力を失わせてきたといえる。社会の価値観のあり方に起

因するところが大きい。

今後の方向を考えるに当たって

日本人の「教育」に対する期待はどのようなものだろうか。子どもたちの「荒れ」は、教育の問題なのだろうか。今日の教育熱は、何のための教育で、何のための高学歴志向なのかを考えてみたい。

現在の繁栄を作り出した技術・技能は、町や村の生活に密着した鍛冶屋、大工、染物屋などの専門職を起源にしている。しかし、日本においては少し事情が違っているようである。明治維新でヨーロッパの進んだ技術に接して驚いた日本が、第一に成さねばならなかったことは、新しい知識・技術の吸収と模倣であり、これを成しえた人たちが日本のリーダーとなってきた。

日本の公教育の起源が、知識の吸収・模倣型＝知育（偏重丸暗記型にあるのは、このような事情からと考えられる。生活に密着したものでなく、新しい知識をいち早く仕入れて来て、日本に適用する（模倣する）ことが、「立身出世」の条件となってきた。教育はこのような「立派」で「できる」人の育成が目的となってきた。教育改革や学校改革などいろいろ行われてきたが、

明治以来の発想は少しも衰えていないのではなからうか。近年、地球規模の環境破壊が問題になっているが、利便性のみを追求することに価値観をおいてきたバブル期の発想を変え、生活に密着した技術、中小企業を持つ高い技術力が正當に評価されるような価値観が求められているのではないだろうか。

文部省「スペシャリストへの道」に見る 専門高校改革の方向

それでは文部省は高校職業教育をどのように改革しようとしているのか見ておきたい。職業教育の活性化方策に関する調査研究会議報告「スペシャリストへの道」(1995)、理科教育及び産業教育審議会答申「今後の専門高校における教育の在り方について」(1998)が基本的な改革方針を打ち出している。

そこでは職業高校の改革として、「職業高校」という名称を「専門高校」に改称すること、職業科の多様化、産業界からの特別講師招へい、地域連携講座、学校・地域連絡会議の開設、科目履修生の受け入れ、大学入試に特別選抜制度導入、専攻科の拡充、インターンシップ(在学中の就業体験)などを提言している。

しかし、核心はいままでの「職業人の育成」をめざした「完成教育」から「生涯にわたって職業学習を継続することを前提にした教育」に転換したことである。ここであげられている「専門性の基礎・基本を重視」「専門必修単位の削減、教育内容の厳選」「選択幅の拡大」などは、高校職業教育の専門性をいっそう希薄にし、さらには我が国の公的職業教育の縮小、衰退を招くのではないかと危惧されている。

このような改革の方向に対して、高校職業教育が今日の発達した科学技術社会の発展と青年期の職業的自立のために果たしている役割を明らかにし、高校職業教育の充実を要求していくことが求められている。

そして、専門高校卒業生の進路保障に精力的に取り組むこと、すべての生徒が「職業高校に入学し、この学校で学んでよかった」といえるように、職業教育を中心にした学校づくり、授業づくりを進めることが最大の課題であろう。

(とおやまたつしろう・新潟工業高校)